

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02418

研究課題名(和文) 教師の子ども理解・授業の見方の深化を促す授業研究の方法論に関する研究

研究課題名(英文) A Study on Methodology of Lesson Study to Deepen Teacher's Understandings of Children and Perspective of Lesson

研究代表者

杉本 憲子 (SUGIMOTO, Noriko)

茨城大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：70344827

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、教師が自身の子ども理解・授業に関する見方を深化させていくことを促す授業研究の方法について、上田薫の授業研究論や研究方法に着目して明らかにすることである。教師の人間理解を重視した上田が、どのような視点から授業をとらえたか、どのような記録・資料を重視したかに着目して、上田の授業研究論を考察した。上田は、子どもを多面的に把握することや、教師の計画の変更の過程を明らかにすることに重点を置いている。また、上田の授業研究論を具体化した方法としての「カルテ」に着目し、その記録としての特質や、その活用を通しての教師の成長・自己変革の論理を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「カルテ」や「座席表」などの授業研究の方法を、その基盤にある上田の授業研究論や教育理論を踏まえて検討したことがあげられる。それによって、上田が授業研究を通して重視した点とその方法論とを統一的に考察することができた。また本研究では、授業研究の手がかりとなる記録・資料をどのようなものに求めるかという点に、その授業研究論の核心が示されると考え、カルテや授業記録など、用いられる記録とその特質に着目してきた。この視点は、授業研究の方法とその重点を探るための切り口として有効だと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine methods of lesson study to deepen teacher's understandings of children and perspective on lesson, focusing on Kaoru Ueda's theory of lesson study. Ueda pointed out the importance of teacher's human understanding. This study clarified his viewpoint of lesson and what types of records or documents he placed emphasis on. Ueda had importance on multifaced understanding of children and process of changes of teacher's plan. Karute is one of a practical method based on Ueda's educational theory. I examined the characteristics of Karute as records and how teachers grow and self-reform by making use of Karute.

研究分野：教育方法学

キーワード：授業研究 教師 自己変革 子ども理解

1. 研究開始当初の背景

日本の授業研究は、教師の力量形成に重要な役割をもつものとして、国際的にも評価されてきた。また、これからの社会が変化の著しいものとなることを踏まえて、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた一層の授業改善が求められている。一方で、当事者である日本の教師に、授業研究が必ずしも意義ある仕事として受け止められていないという実態や、多忙化や世代交代という状況のなかで、授業研究が形骸化し、個々の教師の力量や組織としての学校の教育力の向上につながらないなど、盛んに実施されているという校内授業研究にも問題があることが指摘されている(鹿毛 2017、副島 2013)。一人ひとりの教師の課題意識に根差し、成長の実感につながる授業研究のあり方、また教科や経験年数等の違いを越えて、教師同士が学び合う授業研究の充実が今日の重要な課題だと考えられる。

学級や一人ひとりの子どもの学習の実際をとらえ、それに即して授業改善を図るためには、教師が自身の子どもや授業の見方を問い直し、変化させていく自律的な取り組みが求められる。そこで本研究では、教師の子ども理解や授業の見方を深化させ、教師の変容・成長につながる授業研究の方法について検討したいと考えた。そのような観点から、人間としての教師の存在とその自己変革を重視した上田薫の授業研究論に着目した。

上田は、戦後、社会科の設立に携わった人物である。その後、大学の研究者の立場から、自身の動的相対主義の考え方に基づいて、授業や教師のあり方を論じてきた。また理論と実践との関連に強い関心を持ち、学校現場や民間教育研究団体の実践研究にも深く携わってきた。とりわけ、「カルテ」や「座席表」の活用によって、ひとりひとりを生かす授業の研究をおこなってきた静岡市立安東小学校には、40年以上にわたり指導に携わった。上田が開発し指導してきた授業研究の方法の特質と学校現場におけるその展開を、上田の教育理論との関連において解明したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、教師が子どもや授業に関する自己の見方や枠組みを問い直し、深化させていくことを促す授業研究の方法とはどのようなものかについて、とくに上田薫の授業研究論および授業研究の方法に着目して明らかにすることである。上田の教育理論や授業研究論に基づいて、研究方法としての「カルテ」や「座席表」等のもつ論理を把握することで、教師の自己変革・成長につながる授業研究の方法を究明したいと考えた。

具体的な課題は、(1)人間としての教師の存在とその成長としての自己変革を重視した上田の授業研究論について解明すること、(2)「カルテ」や「座席表」に代表される、上田が開発した授業研究の方法に着目し、教師の自己変革のための授業研究の原理的・方法論的究明を行うこと、(3)学校現場において、それらの方法を用いた授業研究がどのように展開されたか、その活用を通しての教師の成長や自己変革とはどのようなものかを検討することである。

3. 研究の方法

上田の著書・論文、関連する先行研究に基づいて、上田薫の授業研究論の検討を行った。その際、上田が授業研究においてどのような記録・資料を重視したかに着目するとともに、重松鷹泰によって始められた授業分析との関連を考察した。上田は、自身では「授業分析」ということばを用いず、授業分析の方法論の問題点についても論じてきた。それらの論考も踏まえて、上田の授業研究論の特質を明らかにした。

教師の子ども理解・授業の見方の深化を促すための具体的な研究方法・ツールとその論理については、とくに上田が開発した方法である「カルテ」に着目し、カルテの記録としての特質や、その活用が教師の自己変革につながる論理等を考察した。また、子ども理解に重点を置いた授業研究において、授業記録を中心とした記録・資料がもつ役割について考察した。

授業研究の実践的展開の側面については、学校や実践者による著書・論文・実践資料等、関連する資料を収集して検討をおこなった。当初は、実践者へのインタビュー調査等も含めて計画していたが、感染拡大防止等の観点から研究方法を再考し、文献・資料に基づく検討を中心として研究を進めた。

4. 研究成果

(1) 上田薫の授業研究論に関する検討

上田がどのような視点から授業をとらえ、どのような記録・資料を重視したかという点に着目して、上田薫の授業研究論について考察した。上田は、授業分析の根本原理の意義を評価しつつも、その問題として、検討する場の限定、教師の予測・変化の追究の弱さを指摘する。上田自身は、授業記録の立体化を図り、授業場面における発言記録のみでなく、教師の心の動きや考えの転換などを含めて計画の変更の過程を明らかにし、教師の見方とその変化に焦点を当てることを重視した。具体的には、授業者の予測・計画がどうつまずき、変容していくか、また一授業内の動きや発言に限定せずに、必要に応じて他教科や授業の前・後の子どもの姿と結びつけながら

検討するなど、時間的・空間的な幅を生かして授業を追究すること等が考えられる。また、授業記録の立体化だけでなく、個性化という面も着目された。上田は、個々の子どもを人間として理解し、ひとりひとりを生かす授業の実現を求めてきたが、それは実践者である教師についても同様である。個々の教師の必然性に根ざした研究と記録の活用を重視した(例えば、カルテに決まった様式はなく、各自が使いやすいように考えて活用し、変化・発展もするものである)。

こうした上田の授業研究論や方法論の基盤としての動的相対主義の理論とその理論における教師の成長・自己変革の考え方について検討し、教師の自己変革の鍵としての驚きと、驚きの成立の前提となる予測という側面が考察された。

(2) 授業研究の方法・記録に関する検討

上田の授業研究論を具体化した方法として、「カルテ」や「座席表」等が挙げられる。本研究では、とくに「カルテ」の記録としての特質や、その活用を通しての教師の成長・自己変革の論理を考察した。カルテは、教師が自分の予測とくいちがったものを発見したときに、それを簡潔に記すものである(上田・安東小 1970)。「おやっ」と驚くということは、それまでのその子への理解に基づく自分の予測が破られたことを意味し、教師のカルテのとらえ直しの過程は、その教師の視野を変容させるところに意味をもつことが考察された。

ところで、子どもをよりよく理解するにはデータが多い方がよいように思われるが、カルテにおいては、データが多いことはよしとされず、忘れるという人間の側面が肯定的にとらえられている。驚きの記録であるカルテのデータ相互は、つなぎ合わせにくいものとなるが、むしろそこに意味があり、結論を急がず、教師がイマジネーションを働かせて解釈することが重視される。

このようなカルテの方法における客観性の問題をどう考えるかという観点から、上田のとらえる人間理解や客観性について考察した。上田は、「生きた人間としての客観性」(上田 1994)という点から、人間が自分を客観的にしていくためには、空間を広げ、時間をかけて新しい視点から見ることで、そのつみ重ねが必要であることを示している。カルテの研究手法と上田の客観性のとらえ方に関する理解を深める上で、上田がカルテとの関連性に言及している、名古屋大学教育方法研究室の共同研究として取り組まれた R・R・方式(相対主義的關係追究方式)の研究原理についても検討した。

また、授業記録を中心とした授業の記録・資料が果たす役割について検討した。授業の事実に基づく考察は、その一時間の授業改善だけでなく、教師が自分の実践に立脚して自律的に進んでいくことや、立場や経験の違いによらず、協力して研究し合う関係づくりを促す役割をもつ。一方で授業記録は、その授業の事実が全て記述されたものではないし、記述された発言や動作の意味をとらえること自体も容易でない場合があり、記録に基づく考察の難しさも明らかとなった。これらを踏まえて、考察の際にどのような点を大事にすべきかを検討した。授業の事実を相互につなぎながら、子どもの関心の対象や考え、その背景にあるものを探っていくこと、そのためには記録から得られる素朴な感想や気づき、自分にとって理解しにくい発言や意外だと思われる事実を大事にすることの重要性等が把握された。授業記録や子どもの記述等を丁寧に追っていくことを通じて、授業をしている最中にはとらえ切れなかった意外な発言、小さな気づきの中に潜む子どもの発見や思考の面白さに出会うことは、教師が自身の子どもや授業の見方を更新する機会になると考えられる。

(3) 授業研究の実践的展開に関する検討

学校現場において、「カルテ」や「座席表」等の方法を用いた授業研究がどのように展開され、その活用を通して教師の見方の変容や成長がどのように促されたのかという点について、静岡市立安東小学校をはじめとする学校の授業研究に関する著書や、実践者による論文等の収集・検討を行った。実践者の立場からカルテについて論じられた論考を検討し、実践に生きるということの意味を検討する必要性が着目された。また、継続的な授業研究による教師の子ども理解や授業の見方の変化について検討することができた。授業研究の方法論の実践的展開については、その活用が授業者や実践にもつ意味をどのようにとらえるかという点も含めて、今後も検討を進めていきたい。

引用・参考文献

- 鹿毛雅治(2017)「授業研究を創るために」鹿毛雅治・藤本和久編著『「授業研究」を創る - 教師が学びあう学校を実現するために - 』教育出版、2-24頁。
- 副島孝(2013)「校内授業研究を通じた教師の学び - ある公立中学校を事例に - 」的場正美・柴田好章編『授業研究と授業の創造』溪水社、79-95頁。
- 上田薫・静岡市立安東小学校(1970)『ひとりひとりを生かす授業 - カルテと座席表 - 』明治図書。
- 上田薫(1994)『上田薫著作集 4 絶対からの自由』黎明書房、216頁。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 杉本憲子	4. 巻 42
2. 論文標題 上田薫における教師の人間理解に関する一考察 - カルテの方法に着目して -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 茨城大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 182,191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉本憲子	4. 巻 869
2. 論文標題 「令和時代の家庭・地域とともにある学校づくり」 - 授業改善「主体的・対話的で深い学び」の実現 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 茨城教育	6. 最初と最後の頁 4,9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉本憲子	4. 巻 71
2. 論文標題 授業における集団的な思考の過程に関する一考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 茨城大学教育学部紀要（教育科学）	6. 最初と最後の頁 585,594
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34405/00019984	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 杉本憲子	4. 巻 867
2. 論文標題 「令和時代の家庭・地域とともにある学校づくり」 多様な子どもたち一人ひとりの状況に応じた工夫ある取り組み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 茨城教育	6. 最初と最後の頁 4,9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉本憲子	4. 巻 5
2. 論文標題 子ども理解にもとづく授業研究と記録の役割	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 茨城大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻（教職大学院）年報	6. 最初と最後の頁 33,42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉本憲子	4. 巻 864
2. 論文標題 「令和時代の家庭・地域とともにある学校づくり」 多様な子どもたち一人ひとりの状況に応じた工夫ある取り組み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 茨城教育	6. 最初と最後の頁 4,9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉本憲子	4. 巻 861
2. 論文標題 「次世代の学校」を主体的につくるためにー多様な子どもたち一人ひとりの状況に応じた教育ー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 茨城教育	6. 最初と最後の頁 4,10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉本憲子	4. 巻 45
2. 論文標題 上田薫の授業研究論に関するー考察ー教師の成長・自己変革を重視した授業研究の理論と方法に着目してー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育方法学研究	6. 最初と最後の頁 61,71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 杉本憲子
2. 発表標題 上田薫における教師の人間理解に関する一考察 - カルテの方法に着目して -
3. 学会等名 日本教育方法学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------